

ビルマ語の V-V 結果構文に関する一考察
—日本語・中国語・英語との比較から—

小野寺 潤

1. はじめに

日英語をはじめとするさまざまな言語において、一つの文のなかで主動詞の行為のみならずその結果状態をも表現した形式である結果構文 (resultative construction) が用いられている。それぞれの個別言語においてどのような言語形式が結果構文と認定されるかは自明ではなく、それぞれの言語において結果構文として研究の対象となりうる構文について、さらなる研究が求められている。

ビルマ語 (Burmese/Myanmar; *myāma baḍa/bāma zāga*) は主にミャンマー連邦共和国 (the Republic of the Union of Myanmar) において用いられる言語で、シナ・チベット (Sino-Tibetan) 語族、チベット・ビルマ (Tibeto-Burman) 語派に属する。ビルマ語と日本語の系統的関係は全く立証されていないが、語順や助辞 (助詞) の使用等の点で多くの共通・類似した特徴を持っている⁽¹⁾。

小野寺 (2014) は、ビルマ語の S-O-AP-V 結果構文は「弱い結果構文」(weak resultative) と「見せかけの結果構文」(spurious resultative) を容認し「強い結果構文」(strong resultative) を容認しないという点で日本語とほぼ同様のふるまいを見せることを示し、Washio (1997) および斉木・鷲尾 (2009) で提案された結果構文の類型において、ビルマ語は日朝語とともに「《アルタイ》系」に属することを提案した。また、日本語の結果複合動詞に対応するビルマ語の V-V 結果構文について、必ずしも日本語の結果複合動詞と完全な並行性を見せないことを示した。

本稿は、現代ビルマ口語ヤンゴン・マンダレー方言 (the Yangon-Mandalay dialect continuum of modern colloquial Burmese; 以下、ビルマ語とする) の結果構文の全体像の解明のための予備的研究として、日本語や中国語の結果複合動詞 (resultative compound verb) についての先行研究を踏まえ、日中語の結果複合動詞や英語の結果構文に対応するビルマ語の V-V 結果構文⁽²⁾について、日中英語との共通点や相違点を明らかにし、その適格性を決定するメカニズムを解明することを目的とする。

対応するビルマ語と日中英語の結果構文の分析から、ビルマ語の V-V 結果構文においても、日本語の結果複合動詞と同様に、その適格性に「他動性調和の法則 (影山 1993)」と「主語一致の原則 (松本 1998)」が関与していることを提案する。また、ビルマ語の V-V 結果構文には複合動詞と動詞連結構文の2種類があることを示し、小野寺 (2014) において日本語の結果複合動詞と適格性に完全な並行性を見せないとされたビルマ語の V-V 結果

構文は動詞連結構文に分類されることを示した。このビルマ語の動詞連結構文タイプの V-V 結果構文は、複合動詞とは異なる「複文的」構造を持つために「《アルタイ》系言語制約」の反例とはならないことを示した。

2. ビルマ語の複合動詞と動詞連続構文

ここでは、主に岡野（2007）に基づいて、ビルマ語の複合動詞（compound verb）と動詞連続構文（serial verb construction）について概観する。本稿では、2つの動詞⁽³⁾から成り立っている複合動詞（V-V 複合動詞）を扱う。ビルマ語の V-V 複合動詞には、①意味的に類似した2つの動詞を組み合わせる複合動詞と、②意味の異なる2つの動詞を組み合わせる複合動詞があり、それぞれ、構成的な意味を持つ場合と新たな意味を持つ場合がある。ビルマ語はいわゆる孤立語であるため、V1 と V2 が結合して複合語となる際に形態上の変化をしたり助辞を伴ったりすることはない。ビルマ語の否定辞 *mā-*は動詞の前に置かれ、さらに補助否定辞 *-bu:/-phu:*が動詞の後ろに付加するが、ビルマ語の複合動詞において否定辞は複合動詞全体の前に置かれるとされる。

(1) 意味的に類似した2つの動詞を組み合わせる複合動詞

- a. to:te? (発展する) < to: (上がる) + te? (のぼる)
- b. pyɔ:sho (言う) < pyɔ: (話す) + sho (言う)
- c. mā-pyɔ:sho-bu: (言わない) 【否定】

(2) 意味の異なる2つの動詞を組み合わせる複合動詞

- a. pyɔ:pya. (説明する) < pyɔ: (話す) + pya. (示す)
- b. yaunwe (売買する) < yaun (売る) + we (買う)
- c. mā-pyɔ:pya.-bu: (説明しない) 【否定】

次に、ビルマ語の動詞連結構文について示す。動詞連続構文は独立の動詞が形態上の変化や助辞の付加なしに連続し、単一の文の単一の述部を構成する言語形式であるとされる。動詞連結構文を否定する際には (3b) に示すように V2 に否定辞 *mā-*が前接するとされる。ここでは、V2 が具体的な意味内容を失って言えば文法化したものは除き、並列する2つの

動詞が表す行為や事態が継起するものを示す。このタイプの動詞連結構文は、(3c) に示すように V1 と V2 を日本語の助詞テにあたる助辞-pi:によって切り離し、複文にすることができる。

(3) 動詞連続構文

- a. thāmin: [v₁ chεʔ][v₂ sa:]-dε (ご飯を作って食べた。)
- b. thāmin: [v₁ chεʔ] mā-[v₂ sa:]-bu: (ご飯を作って食べなかった。) 【否定】
- c. thāmin: [v₁ chεʔ]-pi: [v₂ sa:]-dε (ご飯を作って食べた。) 【複文】

3. 日英語とビルマ語の結果構文

3.1. 日英語の結果構文

英語や日本語をはじめ、諸言語には「主動詞が表す行為ないし活動が原因となり、その直接的結果として生じる状態を《結果述語》として表現した単一のセンテンスである(影山 2009: 101)」結果構文と呼ばれる以下のような表現がある。

- (4) a. I painted the wall red. (鷲尾 近刊: 4) 【S-V-O-AP】
- b. 僕は壁を赤く塗った。(鷲尾 近刊: 4) 【S-O-AP-V】
- (5) a. John pushed the door open. (影山 2001: 171) 【S-V-O-AP】
- b. ジョンはドアを押し開けた。(影山 2001: 171) 【S-O-V1-V2】

英語の例である(4a)と(5a)はともに【S-V-O-AP】という構造を持っており、結果述語はAPによって表されている。(4a)に対応する日本語の例である(4b)も、日英語の語順が異なるため【S-O-AP-V】という構造になるものの、結果述語は英語の例と同様にAPによって表されている。しかし、(5a)に対応する日本語の結果構文である(5b)では、結果述語はAPではなく複合動詞の第2要素(V2)によって表されている。

3.2. ビルマ語の S-O-AP-V 結果構文

Washio (1997)は結果構文を「強い結果構文」(strong resultative)、「弱い結果構文」(weak resultative)、「見せかけの結果構文」(spurious resultative)の3種類に分類した。斉木・鷲尾(2009)によれば、「強い結果構文」とは、主動詞の意味から結果述語 AP が完全に独立していて、主動詞の意味から AP の意味内容を予測することが不可能なタイプの結果構文であり、「弱い結果構文」は、主動詞の意味から結果述語 AP が完全には独立しておらず、主動詞の意味に AP が表す変化または変化の方向性が含意されているタイプの結果構文である。また、「見せかけの結果構文」とは、AP を副詞と置き換えることができ、AP が結果状態とも行為の様態ともとれるようなタイプの結果構文である。

(6) 「強い結果構文」(strong resultative)

- a. He watered the tulips flat.
- b. *彼はチューリップを平らに水撒きました。

(7) 「弱い結果構文」(weak resultative)

- a. He painted the door green.
- b. 彼はドアを緑に塗った。

(8) 「見せかけの結果構文」(spurious resultative)

- a. He tied his tie tight/tightly.
- b. 彼はネクタイを固く結んだ。

Washio (1997)は、このような結果構文の分類に基づいて、3種類の結果構文の適格性の違いにより、諸言語を「ゲルマン系」、「《アルタイ》系」、「ロマンス系」の3つの類型に分類する結果構文の類型を提案した。

(9) Washio の結果構文の類型 (Washio 1997, 齊木・鷺尾 2009: 49)

	ゲルマン系 (英・独語)	《アルタイ》系 (日・朝語)	ロマンス系 (仏・伊語)
強い結果構文	✓	*	*
弱い結果構文	✓	✓	?
見せかけの結果構文	✓	✓	✓

小野寺 (2014) は、(9) の Washio の結果構文の類型に基づいてビルマ語の結果構文を分析し、ビルマ語の S-O-V-AP 結果構文は基本的に日本語とほぼ並行的に可能となることを示した。

(10) 他動詞ベースの強い結果構文 (小野寺 2014: 111)

- a. The horse dragged the logs smooth. (鷺尾 近刊: 2)
- b. *馬が丸太をすべすべに引きずった。 (鷺尾 近刊: 2)
- c. *myin:-ga. θiʔtoun:-go
horse-NOM wood-ACC
pyaun-pyaun-le:/chɔ-chɔ-le: swe:-dɛl
bare-bare-DIM/smooth-smooth-DIM carry-IND
- d. ^{ok}myin:-ga. θiʔtoun:-go swɛ:-lo.
horse-NOM wood-ACC carry-because
θiʔtoun:-ga. pyaun-chɔ-θwa:-dɛl
wood-NOM bare-smooth-go-IND
(馬が丸太を引きずったので、丸太がすべすべになってしまった。)

(11) 自動詞ベースの強い結果構文 (小野寺 2014: 113)

- a. Drive your engine clean. (Levin and Rappaport Hovav 1995)
- b. *エンジンをきれいにドライブしましょう。
- c. *ʔinjin-go θan.-ðan.-ɕin:-ɕin:-le: maun-bal
engine-ACC pure-pure-clean-clean-DIM drive-IMP

- d. ^{ok}maun-yin maun-ðǎ-lau? ʔinjin-Ø θan.-cin:-θwa:-mɛl
drive-if drive-IND-as engine-NOM pure-clean-go-SUB
(運転すれば運転するほどエンジンはきれいになるでしょう。)

(12) 弱い結果構文 (小野寺 2014: 114)

- a. I painted the wall red. (鷺尾 近刊: 4)
b. 僕は壁を赤く塗った。(鷺尾 近刊: 4)
c. cǎnɔ-ga. nanyan-go ni-ni-le: θou?-laiʔ-tɛl
I-NOM wall-ACC red-red-DIM paint-completely-IND

(13) 見せかけの結果構文 (小野寺 2014: 115) :

- a. He tied his shoelaces tight/tightly. (鷺尾 近刊: 4)
b. 僕は靴の紐を固く結んだ。(鷺尾 近刊: 4)
c. cǎnɔ-ga. phǎnaʔco:-go tin:-tin:-le: chi-laiʔ-tɛl
I-NOM shoelace-ACC tight-tight-DIM tie-completely-IND

(10-13)で示したように、S-O-AP-V 結果構文においては、ビルマ語は「弱い結果構文」と「見せかけの結果構文」を容認するが「強い結果構文」は容認せず、日本語と同様のふるまいを見せる。これにより、小野寺 (2014) では、Washio の結果構文の類型においてビルマ語は日本語および朝鮮語とともに「《アルタイ》系」に分類されることが提案されている。日本語、朝鮮語、ビルマ語を含む《アルタイ》系言語には、以下の制約が存在すると考えられる。

(14) 《アルタイ》系言語制約

《アルタイ》系言語は「弱い結果構文」と「見せかけの結果構文」を容認するが「強い結果構文」は許さない。

3.3. ビルマ語の V-V 結果構文

英語をはじめとするヨーロッパ言語には基本的に見られないが、日本語の結果構文には S-O-AP-V 結果構文に加え、結果複合動詞が存在する。小野寺 (2014) は結果複合動詞に

についても、ビルマ語には日本語と並行的に対応する形式があることを示している。

- (15) a. John pushed the door open.
b. ジョンはドアを押し開けた。
c. John-ga. dāga:-go tun:-phwin.-dɛl
 John-NOM door-ACC push-open-IND

(小野寺 2014: 117)

- (16) a. John kicked the door open.
b. ジョンはドアを蹴り開けた。
c. John-ga. dāga:-go kan-phwin.-dɛl
 John-NOM door-ACC kick-open-IND

(小野寺 2014: 117)

しかし、すべての場合において日本語とビルマ語が並行的に対応するわけではなく、日本語の結果複合動詞が非文法的となるにもかかわらずそれに対応するビルマ語の表現が可能となる場合もある。このタイプの表現については5節で考察する。

- (17) a. John broke the door open.
b. *ジョンはドアを壊し開けた
c. ^{ok}John-ga. dāga:-go phyɛʔ-phwin.-dɛl
 John-NOM door-ACC break-open-IND

4. 中国語の結果複合動詞とそれに対応する日緬語の V-V 結果構文

本節では、主に申・望月 (2009) をもとに、中国語の結果複合動詞について概観し、それに対応する日本語とビルマ語の V-V 結果構文を比較してその共通点と相違点を考察する。

4.1. 中国語の結果複合動詞

申・望月 (2009) によれば、中国語の結果複合動詞の構造は以下のように一般化される。

(18) 中国語の結果複合動詞の事象構造および述語の組み合わせの典型(申・望月 2009: 408)

	前項述語 (V1)	+	後項述語 (V2)
a. 事象	原因事象又は先行事象		結果事象
b. 動詞	他動詞／非能格動詞／非対格動詞		非対格動詞／形容詞

また、中国語の結果複合動詞においては、V1 には他動詞、非能格動詞、非対格動詞のすべてのタイプの動詞が生起し、V2 は状態を表す非対格動詞／形容詞が生起することが多いことが示されている(申・望月 2009: 409)。

4.2. 「他動性調和の法則」と「主語一致の原則」

はじめに、中国語の結果複合動詞が日緬語においても V-V 結果構文として対応する例を見てみよう。

- (19) a. He stepped the steamed bun flat with one stomp of his foot.
 b. Ta yijiao ba-diao-zai-dishang-de-mantou
 he one.stomp ACC-fall-in-on.the.ground-which.is-steamed.bun
cai-bian-le.
 step-become.flat-PER
 c. 彼は足で地面に落ちていた蒸しパンを平らに踏み つぶした。
 (申・望月 2009: 410-411)
 d. maunmaun-ga. cidau?-ne. paunmoun.-go nin:-chi-dell
 Maun.Maun-NOM foot-with bread-ACC step-become.flat-IND
 (マウンマウンが足でパンを踏みつぶした。)

以下の結果構文の例も、日本語およびビルマ語では V-V 結果構文として表される。

- (20) a. Mya Mya cut the tree down.
 b. Mya Mya ba-shu kan-dao-le.
 Mya.Mya ACC-tree cut-down-PER

- b. ミヤミヤは木を切り 倒した。
- c. mya.mya.-ga. θiʔpin-go khouʔ-hlɛ:-dɛl
Mya.Mya-NOM tree-ACC cut-fell-IND

次に、中国語の結果複合動詞が日緬語においては V-V 結果構文にはならず、複文でしか表せない例を挙げる。

- (21) a. A cool wind blew him awake.
- b. Yi-zhen liangfeng ba-ta chui-xing-le.
one-C cool.wind ACC-he blow-awake-PER
- c. *涼しい風が彼を吹き 起こした／覚ました。
- d. *le-ʔe-ga. θu.-go taiʔ-hno:-dɛl
wind-cool-NOM he-ACC blow-awake-IND
- e. ^{ok} 涼しい風が吹いて、彼を目覚めさせた。
- f. ^{ok}le-ʔe-ga. taiʔ-tɔ. θu.-go hno:-tha.-dɛl
wind-cool-NOM blow-as he-ACC awake-stand-IND
(涼しい風が吹いて、彼を起こした。)

申・望月（2009）によれば、日本語で非対格動詞「吹く」と他動詞「起こす／覚ます」を結合して「*吹き起こす」「*吹き覚ます」のような複合動詞を形成することができないのは、(22) に示す「他動性調和の法則（影山 1993）」の制約を受けるためであるとする。

(22) 他動性調和の法則（影山 1993）

日本語の語彙的複合動詞は、原則として、外項をもつか否かの基準により、外項をもつ動詞同士（他動詞・非能格動詞間）か、外項を持たない動詞同士（非対格動詞同士）の間での複合しかおこらない（申・望月 2009: 412）。

さらに申・望月（2009）は、「他動性調和の法則は、項構造において働く法則であり、日本語がヴォイス体系において主格・対格の標示、自動詞・他動詞を区別する標識をもつという形態統語論上の性質を反映した法則である（申・望月 2009: 412）」とする。

加えて、V1 と V2 が両方とも非対格動詞である「*吹き起きる／*吹き覚める」の場合は

「他動性調和の法則」には違反しないが、以下の「主語一致の原則（松本 1998）」に反しているため不適格とされる。

(23) 主語（卓立項）一致の原則（松本 1998）

二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者（通例、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならない。
（申・望月 2009: 413）

たとえば「*涼しい風が彼を [V₁ 吹き] [V₂ 起きた]」という例の場合、V₁ の「吹く」の主語は「涼しい風」であるのに対し、V₂ の「起きる」の主語は「彼」となり、V₁ と V₂ の主語が同一物を指しておらず、「主語一致の原則」に反するため不適格となる。申・望月 (2009) によれば、日本語において働くこれらの「他動性調和の法則」や「主語一致の原則」などの規則は、格標示や動詞の自他の形態的区別を欠く中国語には働かないとされている。

ビルマ語では、日本語と同様に主格・対格の格標示があり、動詞の自他は大部分においては区別されない（例： *phyɛ?* 「壊れる」 vs. *phyɛ?* 「壊す」）が、自他の交替が氣息 (h) の有無によって明示的になる約 50 組の自動詞と他動詞のペアがある（例： *co:* 「折れる」 vs. *chɔ:* 「折る」、*pwin.* 「開く」 vs. *phwin.* 「開ける」）。前述の (21d) に現れたビルマ語の動詞 *hno:* 「起きる／起こす」は自他同形であるが、ビルマ語という言語内において自他の交替を音形として明示的に示す一群の自他動詞のペアが存在することから、ビルマ語においても「他動性調和の法則」および「主語一致の原則」が働いていると考えられる。以下の例を見てみよう。

(24) a. Maun Maun shot a bird down.

b. マウンマウンは鳥を撃ち 落とした。

c. *マウンマウンは鳥を撃ち 落ちた。

d. maunmaun-ga. hɲɛʔ-ko piʔ-cha(*ca.)-dɛl

Maun.Maun-NOM bird-ACC shoot-fell-IND

e. maunmaun-ga. hɲɛʔ-ko piʔ-laiʔ-tɔ.

Maun.Maun-NOM bird-ACC shoot-completely-as

(hɲɛʔ-ka.) ca.-dɛl (マウンマウンが鳥を撃ったので(鳥が)落ちた。)

(bird-NOM) fall-IND

他動詞 *cha* 「落とす」は対応する自動詞 *ca* 「落ちる」を持っているが、(24d) においては「他動性調和の法則」により、他動詞 *pi?* 「撃つ」と調和して他動詞 *cha* 「落とす」が現れている。また、「主語一致の原則」により、V1 の *pi?* 「撃つ」と V2 の *cha* 「落とす」の主語はともに *maunmaun* 「マウンマウン (人名)」である。

5. ビルマ語の V-V 結果構文の下位分類と《アルタイ》系言語制約

4 節では、ビルマ語の V-V 結果構文は日本語の結果複合動詞と非常によく似たふるまいをすることを見た。しかし、すべての日本語の結果複合動詞とビルマ語の V-V 結果構文が直接対応するわけではない。以下の例を再び見てみよう。

- (25)(=17) a. John broke the door open.
 b. *ジョンはドアを壊し開けた
 c. ^{ok}John-ga. dāga-go phyε?-phwin.-dell
 John-NOM door-ACC break-open-IND

小野寺 (2014) では、主に S-O-V-AP 結果構文について述べた Washio (1997) の結果構文の類型を結果複合動詞にも適用して、(25b) が不適格となるのは、日本語の動詞句「ドアを壊す」と「ドアが開く」ことには必然的因果関係はないと考えられるためにこの例は強い結果構文となるためであるとした。しかし、前述のとおりビルマ語も日本語や朝鮮語と同様に Washio (1997) の結果構文の類型で「《アルタイ》系」に分類されるとすると、ビルマ語の強い結果構文の例である (25c) が適格となる事実を説明できない。

2 節において、ビルマ語の動詞を 2 つ (以上) 組み合わせて作られる表現には、複合動詞と動詞連結構文の 2 種類があることをみた。一見すると、4 節で見た日本語と同様のふるまいを見せるビルマ語の V-V 結果構文と、(25c) のように日本語とは異なるふるまいを見せるビルマ語の V-V 結果構文とでは、両者の間に形態的・音韻的・意味的体系に相違はないように見える。しかし、実際には前者はレキシコンで派生される語彙的複合動詞 (lexical compound verb) であり、後者は統語的に派生される動詞連結構文 (serial verb construction) であるという可能性も考えられる。動詞連結構文は、(3) で示したように、V1 と V2 を助辞 *-pi-* によって切り離して複文にすることができる。よって、3.1 節で述べた

ように、結果構文は定義上「単一のセンテンス」であることを要求することから、(25c)の文が純粹な単文ではなく実際には「複文的」な構造を持ち、単文の結果構文とは異なる適格性条件に従っているため、「《アルタイ》系言語制約」には抵触せず適格となっていると考えられる。

日本語や英語の複合語においては、2語（以上）が単純に連続する句（phrase）とは異なり、2語（以上）が複合という操作で1語となった複合語（compound word）は全体で1つのアクセント（英語の場合は（第1）強勢、日本語の場合はアクセント核⁽⁴⁾）を持つという特徴がある。

(26) 英語の複合語アクセント（窪菌 1995: 65）

（大文字はその形態素に強勢が置かれることを示す）

- a. BLACK + BOARD（黒い板） → BLACKboard（黒板）
- b. WHITE + HOUSE（白い家） → WHITE house（アメリカ大統領官邸）

(27) 日本の複合語アクセント（窪菌 1995: 58, 59）（'」はアクセント核を表す）

- a. ジ' ンジ+ブ' →ジンジ' ブ（人事部） *ジ' ンジブ'
- b. ヤ' マト+ナデ' シコ→ヤマトナデ' シコ（大和撫子）*ヤ' マトナデ' シコ

これは複合動詞においても同様であり、たとえば「押す」と「開ける」が結合して「押し開ける」という複合語ができた場合、その複合語全体が1つのアクセント単位となり、[オシアケ' ル]のように単一のアクセント核を持つようになる。それを踏まえ、以下の例を見てみよう。

- (28) a. *ジョンはドアを [[_{v1}壊し] [_{v2}開けた]]。 [コワシア' ケタ]【複合動詞】
- b. ^{ok}ジョンはドアを [_{v1}壊し]、[_{v2}開けた]。 [コワ' シ アケ' タ]【複文】

「壊し開けた」という語の結合が複合語となり単一のアクセントを持つ(28a)の例が不適格であるのに対し、「壊し開けた」という語の結合の構成要素 V1, V2 がそれぞれ一つのアクセント核を持つ(28b)の例においては、V1の「壊し」は継起を表す動詞の連用形であり、全体は複文であると解釈されるため、単文の結果構文に適用される「《アルタイ》系言

語制約」には抵触せず、適格となる。

下に示す (29a) のビルマ語の文は助辞-pi:を用いて (29b) のように複文にすることもできることから、(29a) は複合動詞ではなく動詞連結構文の例である。それゆえ、この (29a) の文には、複合動詞の例である (28a) ではなく、複文の例の (28b) が日本語として対応すると仮定することができる。日本語の場合は「壊し開けた」という語の結合がアクセント核を1つ持つか2つ持つかによって、それが複合語となり単文と解釈されるか、語と語の連続と解釈され複文と解釈されるかが音韻的に明らかとなる。ビルマ語は声調言語であるため、日本語で見られるような音韻的な相違は観察できず、また、語と語が結合する際に日本語の連用形のような形態的な変化もない。そのため (29a) は一見すると「《アルタイ》系言語制約」への反例となるように見えるが、これに対応する日本語の例は、単文の (28a) ではなく、複文である (28b) であると考えられる。このように意味的に複文と対応する (29a) は、実際には「複文的」構造を持っており、そのため単文に適用される「《アルタイ》系言語制約」には抵触せず、適格となると説明できる。

(29)	a.	^{ok} John-ga.	dāqa:-go	phyε?-phwin.-dell	
		John-NOM	door-ACC	break-open-IND	
	b.	John-ga.	dāqa:-go	phyε?- <u>pi:</u>	phwin.-dell
		John-NOM	door-ACC	break-AND	open-IND

6. まとめ

本稿では、日本語や中国語の結果複合動詞や英語の結果構文に対応するビルマ語の V-V 結果構文を対象として、それらを比較することで日中語や英語との共通点や相違点を明らかにした。その結果、ビルマ語の V-V 結果構文の適格性を決定するメカニズムとして、日本語と同様に「他動性調和の法則」と「主語一致の原則」が関与していることを明らかにした。ビルマ語の V-V 結果構文には複合動詞と動詞連結構文の2種類があり、一見日本語と異なるふるまいを見せるビルマ語の例は実際には動詞連結構文であり、複合動詞とは異なる「複文的」構造を持つために「《アルタイ》系言語制約」には従わないことを示した。

しかし、ビルマ語の動詞連結構文の V-V 結果構文が明らかに複文であるかどうかという点については十分考察することができず、結論を出すことができなかった。この点は、結

果構文の類型化という研究プロジェクトにとって大きな重要性を持つ「それぞれの個別言語においてどのような言語形式が結果構文と認定されるか」という問題にも関わることであり、今後さらに考察を深めていく必要がある。

また、本稿での提案をさらに確実な仮説とするためには、豊富な資料に基づく広範で綿密な調査を必要とする。これまであまり研究の対象となつてこなかったビルマ語の結果構文についてどのような形式が対象となるかを確定し、それらの調査・分析を進め、英語や日本語・中国語等の東アジア諸言語と比較することにより、ビルマ語の結果構文のメカニズムの解明にとどまらず、結果構文の類型化という大きな研究プロジェクトにもさらなる貢献ができるものと考えている。

付記

ビルマ語の表記は基本的に加藤（1998）の発音表記方式に従うが、一部改変した。Language consultant として Daw Nwe Nwe Kyaw 氏、Ma Thandar Aung 氏、Ma Hay Mar 先生の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

注

- (1) ビルマ語の言語構造の概観については小野寺（2014）2 節を参照。
- (2) 日中語等の結果複合動詞に対応するビルマ語の表現が「複合動詞」であるかは必ずしも明らかではないので、これらは「結果複合動詞」ではなく「V-V 結果構文」と呼ぶこととする。
- (3) ビルマ語ではいわゆる動詞と形容詞の区別は自明ではないので、日英語などの他の言語で「形容詞」として扱われる語は、ビルマ語では「性質や状態などを表す動詞類」に含まれると考えられる。
- (4) 「アクセント核が置かれたモーラとその直後のモーラとの間で急激なピッチ下降が起こる（窪菌 1995: 9).」

参考文献

- 大野 徹（1996）『新装版 現代ビルマ語入門』泰流社、東京。
岡野賢二（2007）『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』国際語学社、東京。
小野寺 潤（2014）「ビルマ語の結果構文とその類型論的位置づけ―一日英語との比較から―」（『学習院大学英文学会誌 2013』103-120, 学習院大学英文学会。）
小野尚之編（2009）『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房、東京。
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房、東京。
影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版、東京。
影山太郎（2009）「語彙情報と結果述語のタイポロジー」（小野尚之編『結果構文のタイポロジー』101-140, ひつじ書房、東京。）
加藤昌彦（1998）『エクスプレス ビルマ語』白水社、東京（2004年に『CD エクスプレス ビルマ語』として再刊）。
窪菌晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版、東京。
斉木美知世・鷲尾龍一（2009）「言語の類型と結果表現の類型」（小野尚之編『結果構文のタイポロジー』43-99, ひつじ書房、東京。）
申 亜敏・望月圭子（2009）「中国語の結果複合動詞―日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」（小野尚之編『結果構文のタイポロジー』407-450, ひつじ書房、東京。）

- 松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-83, 日本言語学会.)
- 藪 史郎(1992)「ビルマ語」(亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1)』567-610, 三省堂, 東京.)
- 鷲尾龍一(近刊)「対照言語学からの接近: 結果表現をめぐって」(野間秀樹編『韓国語教育論 講座III』1-17, くろしお出版, 東京.)
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Washio, Ryuichi (1997) “Resultatives, Compositionality and Language Variation” *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

辞書

- 大野 徹 (2000) 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』 大学書林, 東京.
- 原田正春・大野 徹 (1979) 『ビルマ語辞典』 日本ビルマ文化協会, 大阪 (1990年再版).
- Cunningham, Nance and Aung Soe Min (2009) *Burmese-English English-Burmese Dictionary*, Paiboon Publishing, Bangkok.
- Myanmar Language Commission (1993) *Myanmar-English Dictionary*, Myanmar Language Commission, Yangon.

凡例

ACC	accusative	(対格)
C	classifier	(類別詞、助数詞)
DIM	diminutive	(指小辞)
IND	indicative	(叙実法、直説法)
IMP	imperative	(命令法)
NOM	nominative	(主格)
PER	perfect aspect	(完了相)
SUB	subjunctive	(叙想法)